

2-13 チームを組織して力を結集！

～想定外渋滞の調査・分析・対策立案をごく短期間で実施～

1. 立場と仕事

建設コンサルタント会社に入社後、一貫して道路畑を歩みながら非常に多くの道路設計業務や道路計画業務を遂行して 38 年が経過し、経験豊富なシニアエンジニアとして道路計画業務に従事していた。

2. 遭遇した事態

当時、会社が主要幹線道路開通区間の開通効果分析という道路計画業務を受注し、管理技術者と自分を含む担当者 3 名で業務を開始した。ところが、道路が開通すれば本来は渋滞減少効果があつて当然であるにもかかわらず、道路開通直後から開通区間末端の既設ランプ合流部で通勤ラッシュの早朝時間帯に予期せぬ渋滞が発生した。発注者は地元から早急な渋滞対策の実施を求められたため、開通効果分析業務とは別に、3～4ヶ月の短期間で渋滞対策を立案する道路計画業務が急遽追加された。また、発注者から本業務を担当していた我々 3 名に対して、「大規模工事を伴わず短期間で実施可能な効果的対策を立案せよ」との厳しい指示があり、事態を一層難しくしていた。

3. 対応内容とその結果

自分を含む計画業務担当者は、的確な渋滞対策を立案するにはまずは渋滞発生現場の実態を把握して真の渋滞要因と渋滞メカニズムを分析することが必須であると結論付け、合流部での渋滞発生状況をビデオ観測して対策案の概略設計を行うことを即断した。しかし、行動に移す前に、現状の管理技術者と担当者 3 名のみでは体制不足だと判断し、新たに対策立案「チーム」を組織して業務分担する事を決断した。

具体的には、管理技術者と担当者 3 名に加えて、ビデオ観測の協力会社を組み入れ、さらに、開通区間の道路計画を担当していた社内の人間も組入れて、「チーム」を組織した。ビデオ観測調査業務、ビデオ観測調査結果分析業務、車線幅や路肩幅を現況より狭くすることによりランプ合流部から渋滞発生ボトルネック箇所まで付加車線を追加設置する計画案などの比較検討案の策定業務、比較検討案を発注者へ説明し協議する業務をチーム内のそれぞれの担当者が分担して非常に迅速に遂行した。

このように、個々に異なる経験や能力を持った社内外のメンバーと効果的に業務分担し、また、チーム内で各対策案の交通工学的な合理性や優位性に関して客観的な評価・議論を重ねた。その結果、最終的には発注者から与えられた短期間で、ランプ合流部から長い付加車線を設置するという「先例主義」に捕らわれない独創的な対策を立案するに至った。

対策を実現するための追加工事を施したのち、渋滞は改善し、地元の道路利用者や沿線の企業および発注者から高い評価を得ることができた。また、経験豊富なシニアエンジニアである自分も、いまさらながらチームワークの重要性を深く再認識した。